

電子企画

へんよう 変容

～変容した世界に希望はあるか?～

世界の構造、概念が生まれ変わる

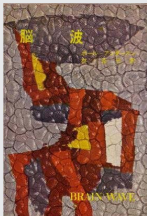
核で滅んだ世界

あるいは支配種としての人間がいなくなった世界

あるいは電脳世界に人類が移住した世界

読み終わった後

あなたは世界を同じものに見ることはできなくなる



のうは 脳波

著者 ポール・アンダーソン

発行 ハヤカワ文庫 SF

関連作品 ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』

海外小説



■ みくんな天才になーれ

この作品では、ある日を境として動物を含む全生物の知能が飛躍的に増大した。多くの労働者が辞職し、政府は機能しなくなり、食糧危機、各地で暴動が発生。世界中が混沌とした様相を見せる。

そもそも人間は皆が常に物事を考えるようにはできていない。考える者と考えない者。その区分が崩れた時、人々は平等になるが、またかつての区分を求めることだろう。その時現れるのが、宗教家である。宗教家が暴れまわる様子は読んでのお楽しみに。

また、農耕従事者のアーチャー・ブロックの視点を通じて、知能の向上した動物の様子が語られる。知性という人間固有のものだと考えてしまいがちだが、動物にも個性や知能はあり、それが此度の騒動で猿は以前の人間並みに賢くなった。彼らの知識の向上を驕ってはいけないう。彼らがかつての人間と同じレベルまで知能が向上したというなら、共生を考えるのもいい。インフラが壊滅的な街を離れ、動物たちと平和なコミュニティを築いたブロックの様子は周囲の喧騒と比べると羨ましく映る。

もし、全世界の生物の知能が向上したら、という設定を最大限活かしている。世界が変わる瞬間を見つめるのは面白いものだ。是非オススメしたい。【ビート板】

天

才

全 生 物

×



マッドマックス 怒りのデスロード

監督 ジョージ・ミラー
 配給 ワーナー・ブラザーズ
 関連作品 原哲夫『北斗の拳』

海外映像



■ V8を讀えよ

マッドマックス怒りのデスロードとは、簡潔にいうと所謂北斗の拳のモヒカンどもによるモヒカンどもとの戦いの話である。ガソリン！砂！炎！V8エンジン！これらをキーワードに頭のネジが外れた連中が頭のネジが外れた戦いを繰り広げる、観るともれなく視聴者の頭を悪くする迫力満点の映像、音楽、改造車、V8エンジンが満載の映画だ。もちろんながら『マッドマックス怒りのデスロード』はその世界観にも魅力は存在する。映像や音楽の魅力は実際の映画館やブルーレイで体験してもらおうとしてここではその魅力的かつ頭の悪い世紀末な世界観について主に紹介しようと思う。

核戦争で人類は滅び、文明はなくなり、かつての世界は荒廃し砂漠へと変容した。放射線の汚染で生活環境はなくなり、生存者たちは武力で互いに物資や資源を奪い合う、そんな世界が本作の舞台である。主人公マックスはV8インターセプターで砂漠を流浪する中、暴徒共に襲撃され、シゲタルという要塞に連れ込まれ、なんやかんやあってこの要塞の主ジョーとその配下である暴徒共ウオーボイズたちと戦うことになるのである。

まず特筆すべき世界観は、この世界では車やそのエンジンの生産ラインなど当然存在せず、特にこの要塞においては車のエンジンであるV型8気筒エンジンが神話の中の聖遺物のように崇められるものへと変容している光景だろう。この世界では車とは権力の象徴であり、その車のエンジンであるV8エンジンは言わば力そのものだ。そのため「V8エンジンを読えよ！」「V8！V8！V8！V8！」といったセリフのようにV8を崇める、なんともシュールな光景が存在しているのだ。

また前述したウオーボイズたちは核戦争の環境汚染により疫病を患っており、寿命が短く全身から毛が抜けた白塗り丸坊主になっており、頻繁に輸血を行わないと生きていけない状態へと変容している。当然のことながら当献血なんてシステムは文明が滅んだ世界にないし通常の方法では輸血はできない。そのため人狩りを行うことでその辺の人を輸血袋として確保し世紀末な世界観をより加速させている。

さらに最も世紀末な世界観を加速させているものとしてその意味不明な様へと変容した宗教観があげられる。ウオーボイズたちのボスであり、要塞の主であるイモータン・ジョーはその長寿故に（環境汚染で普通は長生きできない）不死身のジョーとして神格化されている。ジョーのために命を燃やし意味のある死——つまりは呐喊——を迎えたものは死後の世界で「英雄の館」に招かれる、そんな宗教観である。彼らは銀スプリーを自らの口元にかけて、「俺を見ろ！」と言いながら、ジョーにその散りざまを見せながら散り、勇敢に散っていった仲間たちに「よく死んだ！」と褒めたたえるなんとも狂信的な宗教観を見せている。

以上がこのマッドマックス怒りのデスロードという映画の魅力的かつ頭の悪い世紀末な世界観である。是非ともこの世界観をさらに引き立てる映像や音楽を映画やブルーレイで見比べては如何か。

【たけ】



地球の長い午後

著者 ブライアン W. オールディス
発行 ハヤカワ文庫 SF
関連作品 WORLD WAR Z

海外小説



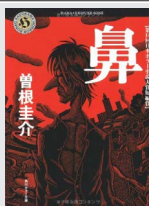
■ その想像力に呑み込まれる

作者の圧倒的イマジネーションにただただ圧倒された。現代社会を生きる人間の目線でここまで緻密に書かれた作中世界を見ると、まるで作中世界に入り込んでしまったような酔いを感じる。

地球の自転が停止し、地球は昼と夜の世界に分断された世界。そこで成長した植物たちが食物連鎖の頂点に君臨していた。人間は文明を失い、原始的な生活を営む。大人たちが「天」へと登り、残された少年少女は自分たちだけで生活を営む。それは常に命の危険を伴う。気を抜いた時には、肉食植物によって捕食されてしまう。

主人公のグレンがアミガサダケを寄生させることによって知能を身に付け、多くの危険を脱していく展開はスリルがあり、先の読めないストーリーに手に汗握る。また、アミガサダケの目的はあくまでも種の繁殖であるため、グレンとの対立も避けられないものとして描かれている。かといって、少年漫画のようにパートナー同士の喧嘩といった生易しいものではなく、種の存亡をかけた命がけの争いである。

ちっぽけな人間。けれど生態系の頂点にいることにほっとする。価値観を揺さぶるという意味で、この作品にまさるものは少ないだろう。【ピート板】



暴落

著者 曾根圭介
発行 角川ホラー文庫
関連作品 同著者「鼻」

国内小説



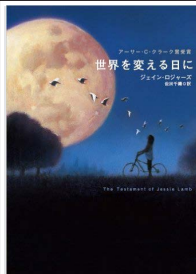
■ 太った知人と瘦せた夫

人間に株価が設定された世界。

その人の株をもっていることがすなわちその人との関わりになる。例えば友人が社会的に評価されれば、友人の株価が上がリ、社会的に評価されている友人が別の人の株を買えば、買われた人の株に注目があつまリ、その人の株価もあがる。その逆もしかりというわけだ。友人・親戚が不祥事を起こすと自分の株価が暴落してしまう可能性がある。それを避けるためにはどうするか。そう、自分が持っている友人・親戚の株を全て売り払い、彼らとの関係を清算してしまうのだ。

現代日本社会では、一度会社をクビになってしまうと、再び同じ社会的地位に戻るのには難しい。この世界のように個人に株価が設定された場合は特に顕著だろう。一度エリート街道を外れると、自身の株価は暴落。当然、自分の株をもっている知り合いは己の株価に影響があるのを恐れて落伍者の株は全て売り払う。その結果、さらに株が暴落。まさに負のスパイラルである。さて、自分の株価が暴落し、明日をも知れぬ身になった主人公。病院で一步も動けぬようになり、「イン・タム」と名乗る。彼は一体どのような人生を歩んできたのか。そしてその結末は。

恐怖のジェットコースターを体感せよ。【ピート板】



世界を変える日に

著者 ジェイン・ロジャーズ

発行 ハヤカワ文庫 SF

関連作品 スティーブン・キング『ザ・スタンド』

海外小説



■ 英雄未満に与えられる賞賛はなく。

英雄的行為の実行者は誰からも讃えられる？ そういうわけではないだろう。生け贄にされる子どもがいたとして、彼(彼女)の親がそれを喜ぶとは考え難い。かといってその行為がその当人にしかできないことではないからといって、他の人に任せてもいいのだろうか。それとも誰かがするのを待つのではなく、これは自分にはできないことだと信じるべきなのか。

バイオテロによって、疫病が全世界に広まった。母体死亡症候群、通称MDSに罹患した女性は妊娠すると死に至る。主人公のジェシー・ラムは十六歳の女子学生だ。もうこの世に赤ん坊は生まれない。その事実を受け止めていつも通りの生活を送ることができないわけではない。

友人は大人中心主義の社会に反旗を翻すべく集会に参加した。主人公も参加し、一時は賛同していたが、反りが合わなくなり脱退した。

そんな中、MDSの治療法を研究している父親から新たな赤ん坊が生まれる可能性を示唆される。MDSの抗体を持つ

た受精卵の代理母になり、命と引き換えに赤ん坊を出産するというものであった。少女は人類の礎になろうと決意を固める。抗体をもった赤ん坊を産み、その子たちがさらなる人類を築き上げるのだ。

私の死はムダなんかじゃない。そう両親に伝えるが、当然理解されるわけではない。

両親は彼女自身と一緒にいたいのだ。彼女の子ともといっしょにいたいわけではない。

両親とジェシーの悲しいすれ違い。どうしてジェシーは両親の気持ちをわかってあげないのか。ページを読み進めながらもどかしさが高まる。親の心子知らずとはよく言ったものだ。

子の行為の尊さは両親にとって関係なく、ただ娘が傷つくのを見ていられない。個人的には主人公よりもむしろ両親の方に同情してしまった。

明るい話ではない。そして少女の行為

が身近な人に認められるわけでもない。子どもが一人の人間として自分で考え、実行していく様子が描かれる。それは堅実に生きることを身につけた大人とは違う。誰かではなく、自分がしなくてはならないという使命感だ。少女の意思は固く、読者自身少女に嫌悪感を抱くかもしれない。

本来的には中編に適した内容だと思われるため、少女の独白を数百ページにもわたって読み進めるのは苦痛に思う方もいるかもしれない。だが、世界が変化してしまつたら自分もこうするかも、というテーマを少女の視点から提示してくれる本作に、きっと自分の考え方・あり方を揺さぶられることだろう。

【ビート板】



雨降りマージ

著者 新城カズマ

発行 創元SF文庫 (年間日本SF傑作選『量子回廊』所収)

関連作品 トウルーマン・シヨー

国内小説



■ 情報が覆うアイデンティティ

第十条 日本国民たる要件は、法律でこれを定める。

第十三条 すべて国民は、個人として尊重される。(以下略)

第十四条 すべて国民は、法の下に平等であつて、(以下略)。

御存じ、我らが日本国憲法の条文である。これは即ち、法律で定められたところの「国民」に、権利保障がされるといふことだ。しかし、逆に考えることはできないだろうか。個人として尊重されるべき、法の下に平等であるべき人が「国民」なのではないかと。

「雨降りマージ」は名作である。五〇ページほどの短編でありながらも、読み進めていくうちにどっと汗が噴き出るような、夢中で早々と読み進めているのもかわらず、いつまでもその罵から抜け出せないでいるような、切に自身の言葉を呪いたくなるぐらいの名作だ。しかし、名作は往々にして語り辛いというのが私の信条で、これまでも可能な限り避けてきた(という失礼だが)。私に表現力があればより魅力は伝わるし、私に

理系的知識が豊富ならばよく解説できるだろう。SFに対する見識が深くても、なんとか形にできたはずだ。そんな懊悩を堪えながらも、「滴ほどの法学の知識をして成し得た理解が、冒頭の妄言になる。そんな稚拙な話も、クマの着ぐるみの少女は面白がつて、楽しいな鼻歌に換えてくれるだろうか。

人には三種類ある。自然人、法人、それから、最近になって増えた架空人。「雨降りマージ」の語り部である「ボク」あるいは「オレ」、もしくは「私」が変容したのは、人から架空人へ。正直なところ、本誌「変身」企画の一つである「変容」について全く合点がいかなかった筆者だったが、この作品を読んで得心した。これは確かに「変身」でも「変態」でもなく、「変容」と呼ぶに相応しい。「架空人」とは言ってしまえば「キャラクター」であり、物語の中のキャラクターになれる、と聞けば私たちの至高の望みに他ならないが、ここで冒頭の話題に立ち返る。「私」は法律上「人」から「架空人」へと変化するのだ。さながら、自然人と対を為す

法人のように。架空人になると、異世界転生するのではない。異世界のキャラクターたちを囲むような情報環境が、キャラクターたちを扱うような距離感が、現実へと訪れるのだ。即ち、人が人だから権利保障されるのではなく、権利保障されるのだから人であるという考え方をするかの如く、そのように権利保障されるのだから、架空人たりえるという形で、「変容」するのだ。よくわからない話で終始してしまっただが、本作はここで述べたような法的にも、勿論SF的にも、そして現代SF的な「意識」や「実存」という面でも興味深く、趣向を凝らした語り口で没頭させてくれる。本来なら数万字かけて語るべき、クマの着ぐるみに包まれた赤毛の少女、雨の日だけに会えるマージの愛らしさも、最後に訴えかけておきたい。彼女が架空の存在だとしても。

【なるみどり】